Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka 2016-09-01

APM news 157

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第34回美術館大学
「秋山孝の神秘2『点と線』～形を失う形の活用の思考～」2

7月9日（土）pm3:00～pm4:30／受講者：65名／講師：秋山孝／進行：堀池真美

元来文字というものは、古代人によって残された「殴り書き」のような痕跡から始まり、しだいに絵として認識され、具象的な形から抽象的な形へと変化しながら現在の形となった。文字は元々イラストレーションであったのだ。この事を理解することがとても重要であると秋山は語る。

また、コンピューターの発明により、人間の手では描けない数学的な「点」や「線」（ベジェ曲線、円、楕円）が出現した。それら幾何図形とは違う、脳と筋肉の指示によってできる形にはエネルギーがあり、それこそ人々の心に入り込む能力があると秋山は考えている。その他にも、「カニッツァの三角形」や「エーレンシュタイン錯視」などの錯視効果も例にあげ、「形を失う形の活用」的思考を解説した。

これらのことを踏まえて改めて秋山の作品をみてみよう。まず、「越後百景・佐渡島」の作品。佐渡島の上空に描かれている天の川を拡大する。描かれた星の形はひとつとして同じ形は無い。もし、この形が全て幾何図形の円で描かれていたらどうだろうか。きっとこの作品の魅力は半減どころかまったく無くなってしまうのではないだろうか。また、作品「Bort-River（修了展2016）」では、線で描いているようにみえるが、これまた拡大してみてみる。「ユーグリット原論」にのっとると、黒の色面と黄土色の色面の境界こそが線であり、そこには複数のエレメントが存在しているのだ。そこに気がつき、意識するかどうかがとても重要なのである。これがまたベジェ曲線のような幾何図形的線であったら、とても気持ち悪いと秋山は強く主張する。透視図法と同様の不快感を与える。それはなぜであろうか。数列的な図形や線は「平均値」で描かれているからであると秋山は結論づけた。

話は秋山の幸福論にまで及ぶ。絶対的幸福を求めるアランの幸福論を秋山は、辛い修行のようだと感じ、「幸福はほどほどで良い」という結論に辿り着いた。それはアランの幸福論から逃げているのではなく、むしろ自分の方が更に幸福であるということを深く考えるという、正に「形を失う形の活用」的思考であるという。

講演の中で何度も「素晴らしい」「美しい」という感情的な言葉が登場し、秋山の情熱をバシバシを感じる講演であった。進行役の堀池助手は、人々が当たり前に捉えている物事に疑問を持ち、その根本になるものをまず理解しようとする秋山の情熱が魅力に繋がっているのだと感じたとまとめた。講演中、秋山は学生へ向けて、性能の良いルーペを買いなさいと諭した。何事にも真剣に向き合うと、見えないものが見えてきて、そのものの本質や秘密が見えてくるという。秋山の神秘の根源は全てそこから始まっているのであろう。

講演の最後に「面」についてはどうなのかという質問が出た。実はそれは「秋山孝の神秘」シリーズの次回のテーマである。次回への期待を膨らましつつ、第34回美術館大学は幕と閉じた。（たかだみつみ・APM事務局長／APM公式ホームページより抜粋）